

論文の概要

本博士論文は、独立戦争期の学匠詩人グループ「コネティカット・ウィッツ」が開拓したアメリカ的叙事詩を扱いながら、その「友愛の詩学」とそれが不可避的に包含する「裏切りの恐怖」が、同時代の社会と言説といかに密接な関係を切り結んでいたかを検討したものである。

もちろん、彼らの叙事詩は旧大陸の叙事詩を凌ぐ「独自性」を保持していたわけではない。彼らの作品はイギリス文学に深く依拠するためミルトンないしポープの模倣的性格が強く、のちのアメリカン・ルネサンス作家も希求した「アメリカの文化的独立」をそこに見出すのはあまりに難しい。

しかしながら、彼らの文学運動を駆動させた「精神」は、同時代の文脈において、極めてアメリカ的だ。なぜなら、彼らの「文学的使命感」は、ピューリタン植民地時代、たとえばジョン・ウィンスロップの「キリスト教慈愛の雛形」における「丘の上の町」のヴィジョンが象徴する「使命感」ないし「選民思想」を基盤にしながら、十八世紀後半独立戦争期においては、エモリー・エリオットが言う「パークレイ的な丘の上の文化都市」として、継承されていたからだ。ジョージ・パークレイは、1720年代、同時代イギリスの社会・政治に失望し、「帝国ないし学問の変遷」の思想に基づき、その「最後の帝国、文化的繁栄」をまずはバミュダ諸島に、やがてアメリカに幻視して渡米し、イエール大学に莫大な思想的・物理的・知的財産を残している。「丘の上の町」から「丘の上の文化都市」へ、そして「丘の上の学府」への歩みには極めてアメリカ的な文化的・文学的現象が胚胎している。

以上の視座から、本博士論文は、「友愛の詩学」を上記コネティカット・ウィッツの文学的使命感を駆動させた主たる要素、ないし不可欠の「修辞」として位置付ける。それを「修辞」とみなすことは、同時代においていかに人間の感情が政治化され、いかにその根本に「裏切りの不安」が潜んでいたかを浮き彫りにする。無論、この「友愛の詩学」は、上掲ウィンスロップの「キリスト教慈愛の雛形」にも既に見られるものであり、旧大陸由来の啓蒙思想をその発展の礎とするものの、独立戦争というアメリカ的文脈が「裏切りの恐怖」を増大させ、その「友愛」を急速に修辞化・政治化させる。

かくして本論文第一部はコネティカット・ウィッツの友愛の詩学が独立戦争期における「王党派」の記憶から始まったことに重きを置く。アメリカ的叙事詩の研究において、その端緒に位置付けられることの多いティモシー・ドワイトの『カナン征服』(1785年)は、単に独立戦争の勝利を謳ったものではなく、そこにはドワイトの父親をも代表とする王党派の記憶が深く影を落とし、まさにそのために引き起こされた詩人自身の苦悩を反映している。イエール大学のけるドワイトの親友ジョン・トランブルは、彼の苦悩を知らぬはずはなかったが、しかしながら、独立戦争期を題材とした自身の(擬似)叙事詩『マクフィンガル』(1782年)においては、王党派ないしストーリーである「マクフィンガル」を主人公に据え、その「国家的裏切者」をめぐる問題意識を否応なく露呈させる。そこでは、単に王党派を「裏切者」として前景化させるだけでなく、その視座によって「独立へ至る道」を正当化せざるを得なかった初期アメリカの歴史自体が抱える「欺瞞性」を暴露する。

無論、そうした「欺瞞」は独立戦争後、抑圧される。しかし、独立戦争をめぐる「負の記憶」は、「民主主義」に警戒を抱かせ、「安定」「秩序」を優先する「連邦主義」を、コネティカット・ウィッツをはじめとした知識人に流布させていく。当時が「連邦主義の時代」と呼ばれるゆえんであり、そ

これは本博士論文第二部の基礎である。知的自負心と民主主義への恐怖は、彼らの代表作と言ってよい『アナーキアッド』(1786-87)において甚だしい。しかしながら、連邦派は1790年代に共和派との対立を深め、こうした社会言説はコネティカット・ウィッツの集団的有り様それ自体も大きく変容させる。第二部後半は、現代においてほとんど忘却された詩人レミュエル・ホプキンズの「ギロチーナ」を扱うが、本作が秘密裏に胚胎させるのは、コネティカット・ウィッツの「裏切者」ジョエル・バーロウへの友愛だ。バーロウは、前掲『アナーキアッド』の共同執筆メンバーとして深く関わったものの、1788年の渡仏後、共和主義へと転向する。これは連邦主義の立場を採るコネティカット・ウィッツにとっては裏切り行為の何ものでもなく、とくにバーロウとイエール大学の同期であったノア・ウェブスターは友人の転向を罵倒して憚らない。しかし、ホプキンズの「ギロチーナ」を精読するならば、彼の断固たる連邦主義的立場がブラック・ユーモアとゴシック趣味で提示される一方、バーロウを裏切者とせざるを得ない社会状況とともに、コネティカット・ウィッツの友愛の有り様それ自体を疑問視し揺るがす視点を与える。社会的使命感と内部分解の恐怖が奇妙に結託した時代に、コネティカット・ウィッツの叙事詩もまたその二面性を詳らかにしていく。

連邦主義の時代は、初代大統領ジョージ・ワシントンの死でもって終わりを告げる。代わって、1800年のトマス・ジェファソンの第三代大統領就任と共に共和主義の時代が始まる。本博士論文第三部は、この世紀転換期に鑑み、デイヴィッド・ハンフリーズとバーロウがその「友愛の詩学」に基づきながら、いかに来るべき国家連帯の有り様を、それぞれ「ワシントン将軍逝去の詩」(1800年/1804年)と『コロンビアッド』において夢想したかを検討する。前者は、極めて叙事詩的にワシントンを英雄化しながらも、連邦主義が孕む階級的人種的性差的限界を暴露する。後者『コロンビアッド』は同じくワシントンを英雄化しつつ、その歴史的原型を南アメリカはペルーの伝説的君主マンコ・カパックに見出す。しかし重要なのは、マンコ・カパックの敵として勸善懲惡的に打倒される先住民酋長ザモルの存在だ。ザモルを、独立戦争期が発展させた「裏切りへの恐怖」の強力な象徴として読むとき、『コロンビアッド』は「友愛の詩学」が孕む矛盾を最も強く反映させた叙事詩として浮かびあがる。

以上、全三部を通じて見えてくるのは、独立戦争期とはかくも激動の時代であったという自明の風景であろう。独立戦争期が与えた「トラウマ」(第一部)は、「ゴシック」として抑圧されながら(第二部)、その後も解決されることなく「パラドクス・矛盾」(第三部)として継承される。

むろん、たとえばハンフリーズの詩を人種的排他性として批判することは容易であろう。第三章がその作品『アナーキアッド』が「ゴシック化」される瞬間、先住民の存在に対する忘却が浮き彫りになる。文学的審美性は倫理性と衝突する。こうした人種的側面から、第四章はホプキンズの作品に見られるジェファソンの黒人差別批判を、第六章はバーロウの作品に見られる奴隷廃止主義と人種的共感を、それぞれ評価する。『アナーキアッド』と「ワシントン将軍逝去の死」が、十八世紀において依然威信の揺らがぬニューイングランドの名家に生まれたハンフリーズとトランブルを中心に書かれた一方、「ギロチーナ」と『コロンビアッド』がコネティカットの片田舎の農家に生まれたホプキンズとバーロウによって書かれたことは、社会的出自が人種観に少なからぬ影響を与えた証左である。

しかし何より重要なのは、こうした相反する要素を混在させつつ豊穡な詩業を残したコネティカッ

ト・ウィッツ全体を認識することによって、独立戦争期という激動の時代のアメリカが見えてくる点だ。先行研究において、コネティカット・ウィッツを包摂的に捉えた研究は決して多くない。二十世紀前半におけるパリントンとハワードの研究がその基礎をなす一方、その後は各詩人にそれぞれ重きが置かれるかたちで研究は進められてきた。とりわけパーリントンによって提示されるコネティカット・ウィッツの姿は、端的に言えば、「連邦主義ドワイト対共和主義バーロウ」の対立軸に、その宗教的政治的構造が単純化され、そのイメージは今なお支配的である。さらに、ロウの現状認識に従って、アメリカ研究が「ナショナリスト」と所謂「ニュー・アメリカニスト」に対置されると捉えるならば、コネティカット・ウィッツの「保守性」は重要だ。なぜなら、その「文化的保守性」がナショナリストに受け入れられず、その「階級的・性差的保守性」がニューアメリカニストに受け入れられずに、双方から軽視された状況が明らかになるからだ。翻って、本博士論文の第二部と第三部が提示する人種の問題は、彼らの作品がもつその批判性だけでなく限界も含め、彼らの詩学を再検討する際の重要な指標になるとともに、パリントンによって定式化されたコネティカット・ウィッツの有り様——連邦主義ドワイト対共和主義バーロウ——を再検討する契機ともなるだろう。

本博士論文は、これまでほとんど顧みられることのなかった比較的マイナーな詩人達、ホプキンズとハンフリーズに光をあて、コネティカット・ウィッツ全体の意義を再検討した点が野心的である。ホプキンズは前述のとおり、1790年代のバーロウの政治的宗教的転向に対して、ドワイトやウェブスターのように「裏切り」として切り捨てることも友愛の終焉として受け入れることも出来ない苦悩せる詩人であった。またハンフリーズは、本論文序論が詳述するように、修辞としての「友愛」だけでなく、もっと素朴に、しかし極めて本質的に彼らそれぞれを連帯させて「友愛」を耕し、若き文学者たちを建国の父祖たちジョージ・ワシントンやジョン・アダムズに紹介し、その作品群を知らしめた媒介的人物であった。ハンフリーズがいなければ、コネティカット・ウィッツの友愛もなく、彼の媒介がなければ、コネティカット・ウィッツの文学と同時代知識人との歴史的接点もありえない。

本博士論文の最終章は、「アメリカ辞書の父」として有名なノア・ウェブスターを対象とする。彼が「コネティカット・ウィッツ」として認識されることはほとんどないが、前述のとおりウェブスターはバーロウとイエール大学で同期であり、1780年代には『アナーキアッド』を生むことになったハートフォードの文学同好会「ハートフォード・フレンドリー・クラブ」の創設期に頻繁に出入りし、その啓蒙思想と連邦主義をいかに吸収しながら、彼らとの友愛を育んだ。彼をコネティカット・ウィッツの不可欠な一人として再定置するなら、代表作『アメリカ英語辞書』が「アメリカ英語」の独自性および必要性を主張しつつ、その例文に、聖書やミルトン、ドライデン、ポープ、ジョンソンだけでなく、ドワイト、トランブル、ハンフリーズ、ホプキンズ、バーロウらコネティカット・ウィッツの作品からの引用が使用されている点は注目に値しよう。すなわち、『アメリカ英語辞書』は、ウェブスターがイエール大学やハートフォードで育んだ友愛の記憶を基盤としながら、コネティカット・ウィッツの「言葉」を最終的にまとめ上げた場所として浮かび上がる。ウェブスターをコネティカット・ウィッツの時代における「最後の記憶の継承者」として位置付けながら、その『アメリカ英語辞書』を再読することは、新たな「アメリカの叙事詩」の可能性を展望することにほかならない。

審査の要旨

小泉由美子君の本博士号請求論文に関して、審査委員会は 2019 年 11 月 5 日（火曜日）に本塾北館第二会議室で公開口頭試問を行なった。外部審査員であるシドニー大学のポール・ジャイルズ教授は書面参加となった。以下、討議結果を述べる。

小泉君の本論文は、これまで文学史的にはあまり顧みられることのなかった 18 世紀後半のコネティカット・ウィッツと呼ばれる学匠詩人たち、すなわちティモシー・ドワイト、ジョン・トランブル、レミュエル・ホプキンス、デイヴィッド・ハンフリー、そしてジョエル・バーロウらイエール大学ゆかりの作品群を精緻に分析し、彼らの作品群のうちにアメリカ独自の叙事詩の誕生を見るものである。アメリカの独立戦争期および建国期は王党派と独立派、あるいはフェデラリストとリパブリカンの政治的分裂とともに人種問題や性差問題も孕んでいたが、それでも国を統一していかなければならなかった時代の作品を、フラタニティ（友愛）をひとつのキー・コンセプトとして読み解きつつ、最終的には「ノアの方舟の彼方」と題する結論部において、彼らとハートフォード・フレンドリー・クラブを通じ親密な友情を交わしていたノア・ウェブスターがいかにウィッツの文学的遺産を『アメリカ英語辞書』（1828 年）に取り込んでいったかを鮮やかに示す。もちろん同論文は、このウェブスターの『アメリカ英語辞書』こそが福沢諭吉や中浜万次郎らが北米より持ち帰り近代日本形成に役立てたテキストである、という環太平洋的意義を吟味することも忘れてはいない。ヨーロッパの詩的・文化的伝統の継承に関する視点が欠落しがちなアメリカ文学研究において、法律上はまだイギリス植民地であったにもかかわらずイギリス文学史では黙殺されてきた建国期の文学、なかんずく詩作を精緻に分析し、アメリカの叙事詩の確立の瞬間を跡付け、さらにその文学史のみならず文化史における位置まで再定位していく手法は極めて説得力に富む。それは小泉君が本博士論文執筆段階である 2016 年には日米協会の奨学金を得てニューイングランドの博物館や古文書館の短期調査を行い、2018 年度にはフルブライト留学生として一年間、ほかならぬイエール大学で徹底的な調査を重ね研鑽を積んだ賜物である。

第一部ではドワイトとトランブルに焦点があてられ、そこでの王党派と独立派の関係性が論じられる。ドワイトはそこに父親との関係を描き込み、トランブルは親友であるドワイトの王党派への愛憎と裏切りの詩学を描き出す。第二部は独立期のアメリカが連邦派と独立派に別れた際、連邦派を中心としたコネティカット・ウィッツの共同執筆になる擬叙事詩 (mock epic) 『アナーキアッド』において、建国の父祖の一人トマス・ジェファソンを槍玉にあげながら愚民政治 (mobocracy) を批判し、一般読者に訴えた経緯を辿る。しかしその過程で、アメリカ先住民をゴースト的な存在として描くことで、ウィッツが自分たちの権利を正当化してしまったことを批判的に洞察する。このゴースト化がゴシック的ギミックであることに注目し、『アナーキアッド』がアメリカン・ゴシックの父と呼ばれるチャールズ・ブロックデン・ブラウンに先駆けたゴシック作品であることを看破した点は旧来の文学史的常識を覆すだろう。そして第三部はここで言及される人種の問題を、初代大統領ジョージ・ワシントンへ捧ぐ詩をしたためたハンフリーと、連邦派から共和派に転向したジョエル・バーロウの詩のうちに見出す。とくにバーロウの『コロンビアッド』が、南米部族の争いを描くことによって、自身の裏切りと友愛、人種に関する問題を隠喩化してみせたという小泉君の見解は示唆に富む。

もちろん、問題点がないわけではない。

最大のキー・コンセプトである友愛に関しては、建国の父祖たちとも縁の深いフリーメイソンとの関連をも視野に入れ、その協同意識と相反する排他性についても考慮すれば議論に深みが出たはずである。さらに、新歴史主義批評家キャシー・デイヴィッドソンが初期アメリカ小説を扱った名著 *Revolution and the Word* (1986) において“sentimentality”や “sensation”を強調し、家父長制的理性のみが支配したわけではない当時の言説空間を浮き彫りにしたように、本論文も、もう少し当時のジェンダー・ポリティクスを意識した論理構築を行ってれば、さらに説得力を増したであろう。

また、本論文は友愛に拘るあまりに、たとえばジョエル・バーロウの転向すなわちウィッツの仲間たちへの裏切りが強調されすぎているきらいがある。この発想が成立するには、彼らのフラタニティが不変のものであるという前提が不可欠になるけれども、この詩人たちがかくもノスタルジックな世界観を貫いていたかどうかは、定かではない。ジョン・トランブルが王党派の同胞殺害を聖書のカインにも等しい裏切り者の証拠と見立てる予型論的想像力を展開しているのは、独立派に属する詩人が自らの罪悪感を抑圧している証左と見る視点は興味深いが、そもそもこうした罪悪感はアメリカ独立革命全体に蔓延していたのであり、ベンジャミン・フランクリンを含む革命指導者たち自身にしても、大英帝国からの独立に関しては——英米の亀裂を埋めようもない絶望的な局面に達していたにもかかわらず——居心地の悪さを感じていたのだから。

さらに『アナーキアッド』で応用されるアーサー王伝説の魔術師マーリンを考察するにあたっては、19世紀におけるアーサー王伝説復活以前の「予言者マーリン」の政治的利用について勘案した上、それがアメリカの地に移植された背景・理由を論じていれば一層盤石な理論構成になったことと思う。

とはいえ、これらの問題点は小泉論文がここまで積み上げてきた議論があってこそ誘発されるものであり、論文そのものの瑕疵ではない。それはむしろ本論文の潜在的可能性を裏書きしよう。

小泉君はドワイトの詩 *Greenfield Hill* (1794年) をめぐる論考を厳密な査読で知られるアメリカ学会の年報『アメリカ研究』第51号(2017年)に発表し、若手の年間最優秀論文を対象とする第5回斎藤眞賞を受賞して、すでに建国期文学の専門家として広く認識されている。また今回の外部審査員で、かつてオックスフォード大学アメリカ研究所所長及び国際アメリカ学会会長を務めたジャイルズ教授は、一体なぜいま、アメリカ文学史では長く忘れられがちであったコネティカット・ウィッツを研究せねばならないのか、その現在的意義さえ序論で十分に論じられていれば、本論文は英語圏における出版も可能な第一級の研究であると断言する。かくして本論文が我が国においても国際的にも将来大きな学術的貢献を成すことについては、審査員全員の見解が一致するところとなった。

以上の経緯を踏まえ、審査委員会は、本論文に散見される若干のケアレス・ミスを修正するという条件を課した上で、小泉由美子君の論文を博士(文学)の学位授与にふさわしいものと判断する。

(2019年12月6日)